中斎塾　東京フォーラム
平成 27 年度　第 1 回講話

平成 27 年 1 月 10 日
於　湯島聖堂

先ほど猪瀬理知長が挨拶をしていただいた中で、縁尋機妙多逢聖因（えんじんきみょうたほうしょういん）とありましたが、縁は異なもの味なもの。
いろいろな御縁と御縁が重なって素晴らしい縁に繋がる。またその縁が、縁を呼んでいく。何と妙味のある言葉でしょう。

安岡正篤先生は、家族に「縁は大切にしなさい」と強く言っておられました。安岡先生の父親が日通におりましたので、自分の子供たちの代になって縁が切れるのは良くないから、息子の正泰さんには「日通に入りなさい」と言っていたそうです。親の一言とは大きいですね。孫の定子さんにも影響は大きく、二松学舎で学んだ経緯は、お祖父さんが「二松学舎に入りなさい」と言ったから入学をした。その人の一言は、重く大きいものだなと感じます。
よい場所で、よい人に出会って、よい話を聞いて、次から次に良い循環ができる。「縁尋機妙」と「多逢聖因」は、だいたいセットでお話や、お考えになることが多いです。
「縁尋機妙」と「多逢聖因」は、御自分で調べてみてください。聞くだけだと忘れますから、家に帰って調べると納得されると思います。調べ方も学ぼうと意欲のある方は、語源を調べると良いでしょう。どういう語源かと調べられると、内容が良く分かってくると思います。
たまたま私の関係している会社が ISO に取り組んでいます。その会社は ISO を先進的に進めているので専務が講演に呼ばれました。講演内容が雑誌にも載るそうなので、原稿を読みたいと思い読ませてもらいました。その中に危機管理があった。危機管理の中で「危機及び機会 ISO」と出していた。その原稿を読んで、なんと日本語の下手なことと思い、専務に「危機」は上位に書いてあって「機会」が下位に書いてある。「及び」という言葉は、含むという意味があるが、何故それを繋げているのか。及びの説明がよくないので、調べて文章を推敲してくださいと付け加えて、原稿を返しました。
相手からは、「原典にあたって見ました」という返事が来て、ISO を紹介している日本人側の誤訳でございます。原本を読んでいて、やさしいことを実に難しく書いてあるとつくづく思いました。
何故こういう話をしたかと申せば、「縁尋奇妙多逢聖因」を御自分で調べれば、好むよう

な解説が目に入ってきます。自分が嫌いだと思えば、頭に入ってこないから申し上げました。

テーマ

「人は、その性格にあった事件しか出あわない」

紹介書籍

『少しだけ、無理をして生きる』城山三郎著　新潮文庫

作家の城山三郎さんのペンネームのつけ方が面白かった。名古屋に城山という場所があるそうです。三月に引越しをして城山にいるから、城山三郎とつけたそうです。

城山三郎さんは仕事が性に合わないので、文学賞に応募したら新人賞を受賞してしまった。その時に電報を運んできてくれた人が「ここに城山という人はいますか」と聞きましたら、奥さんは「そんな人は知りません」と答えてしまった。「でも住所はここです」と言ったので、「ちょっと待ってください、亭主に聞いてみます」と、奥さんが風呂に入っていている御主人に、「城山さんという人、知っている？」と聞いたら、「俺だ、俺だ」というので電報を貰い、めでたく受賞をしたそうです。もし奥さんが「そんな人、知らない」と追い返していたら、もしかしたら城山三郎という作家は生まれなかったかもしれない。そこら辺の経緯は面白いですね。

今日お話する城山三郎さんの本『少しだけ、無理をして生きる』ですが、その中に面白い項目がありました。

渋沢栄一と渋沢喜作の紹介がありました。渋沢栄一は、俗にいう「建白魔」でして、どんどんアイディアを出して、調べ、吸収して、提案をしまくります。

渋沢栄一・喜作は、幕末に鎖帷子や武器弾薬を集め百人ぐらいの同志を募って、高崎城を乗っ取り、次は横浜を焼き討ちにするという計画を立てていました。今でいうテロです。その計画が中止になり逃げ出して、一橋家に転がり込んだところまでは同じでしたが、その転がりこんだ後の人生行路が変わりました。

渋沢栄一は転がり込んだくせに、主君に会わせてもらってお互い氣に入ったら雇われようと、まあ日吉丸の出会いみたいなことをした。栄一は小柄で太っていましたが、徳川慶喜が馬で掛ける時も必死になってついて行きました。慶喜が「妙な男がついてくるがあれは何だ」と、家臣に聞いたら「今度採用しようと思っている者どもです」とあり、渋沢栄一は一橋家に入ったというより拾われたという感じです。

栄一は親から貰った百両を飲めや歌えと遊興費で使ってしまい、お金が無いから借金し

て、そのお金を返すためにお給料を充てていました。或るとき、天井がやかましいので調べたら天井裏のネズミが走り回っていた。ネズミを捕まえ、ちょうどお腹が空いていたので、じゅうじゅうと焼いて食べたそうです。後年、美味しかったと言っています。それからは、お腹が空くと家にいるネズミを捕まえた。

ここから見えることは、この家にはネズミがいる。捕まえて自分のエネルギーにし、家にもネズミがいなくなるので一石二鳥になる。

若い時からそういう性格だったようで、自分で出来ることは自分で行動して、出来ないことは常に上申書を書いて建白をすることを続けていったそうです。最後は、お殿様まで建白書がいき、「おもしろいやつだ、使ってみよ」となりました。栄一が社会に出る最初のきっかけです。

では、従兄弟の渋沢喜作はどうであったか。喜作も百姓の出で、お金のほうは、まるっきり駄目でしたが剣術が好きでした。剣術の腕を磨いて剣術指南役になり、実力が上がってくると自分の力を試したくなる。喜作は彰義隊を組織した創立者です。

血の滾る若者が一橋家に転がり込んで、一方は剣術に精を出し、もう一方は建白に精を出して人生行路が変わってきた。

人間ある程度までは同じように人生行路を歩んでいくが、途中で変わり始めてきます。

今回のテーマ「人は性格にあった事件しか出会わない」とは、その性格が出会う人、出合う事件を吸い寄せてくる。選んでいる。自分がそこに向かって行く。

ここの会場にお越しの皆様は、なかなか個性的な人が多いので、自分で事件を求めなくても向こうから来ます。その性格に合っている。私はそう思います。自分のことでもそう思いますので、皆さんも同じではないでしょうか。

それぞれが性格に合った人と付き合う。でも、よく周りを見ると、自分の性格に合わない人はどうしても増えてきます。一年に一回ぐらいは見直したほうが良いでしょう。自分の性格に合わないものは、あまり強烈にしなくても良いですけれど、自然とさようならをしたほうが良いと思います。

今年は大掃除の年と決めています。今は、親のものを整理しています。金目の物はいらないというより有りませんが、字が書いてある物を集めています。その中で父親の闘病日記みたいなものが出てきた。母親のも出てきた。だから自分の性格に合ったものがだいぶ集まっています。私には兄が一人いますが、共に親のものを整理していますと、兄は字の書いてある物は氣にも留めない。放っておくと、どんどん捨てていく。やはり性格ですね。

昨年末から今迄の動きで…

昨年の 12 月 4 日に顧問に会ってきました。いつも顧問に会う時は、誰かと一緒なのですが、今回は一人でした。大晦日にメールがきました。

「12 月 4 日にお会いして、今年の会社の経営方針をしみじみに決めました。2 月初旬にインドに参りますが、インドでの話の主題は何かと問われて、しみじみについてと答えました。そうしましたら、響きが氣に入ったときました。その時のテーマにも決めましたので、塾長のお考えをおもらしください」ときました。

返信は「自分の越し方をしみじみと見つめる年にしたい。しみじみとした思いを深めるためには、我が思いがあり、それにふさわしい時期、場所を無意識のうちに求めるものだと思います。やはりしみじみの五感からは、人生の旬を迎え、そして人生の妙を味わう年代に入ったと実感と心豊かさが浮かびます。そして四季の移ろいがある日本の季節感を体感します。日本人として生まれたことをしみじみと嬉しく思うと共にありがたく感謝する氣持ちが湧いてきます。

＜良寛さまの俳句＞

焚くほどは　風がもて来る　落ち葉かな

倒るれば　倒るるままの　庭の草

盗人に　とり残されし　窓の月

知足の心をしみじみと味わえる俳句であると感じます。またお目にかかれるのを楽しみにしています」と返信しました。

そしたら、すぐ返信がきまして「溢れる情感に感謝です。インドでのお話は、沈黙は最大の力なりで始めます。そしたらこれでも味氣のない文言になってしまいますので、信胤さんの「一葉を知って天下の秋を知る」この英訳を探してみます。また会社の方針で、しみじみでは弱い。責任はお前だぞと会社に怒鳴り込んできた方がいます。頼もしい限りです」と書いてきました。このまま終わりにしたら、顧問があちこちで叩かれるだろうと、多少責任を感じまして、「絶対のしじま」という言葉があります。中村天風先生の言葉の中に、天の声という表現があります。絶対のしじまは人間には計り知れない強力、強大な力を持つものというイメージがあります。天の声はその強力な力をじさしていると存じます。日本人の得意性は、このしじまを無意識に感じていることだと考えます。西行法師の和歌「なにごとの　おわしますかはしらねども　かたじけなさに　涙こぼるる」も、底辺では繋がっていると思いますので、ご参考までにと書きました。そしたら、またすぐ返事がきまして「凄いこと大切なことを教えていただき有難うございました」とあったので、これでお終いにしました。

顧問はお出でにならないけれど、こういうやり取りはしています。絶対のしじまはどこかで説明をいたします。相対性理論の説明の中に、絶対の静寂（しじま）が役に立ちます。唯識学の中に出てきます。

変わったもので、作家の猪瀬直樹事務所のスタッフから、猪瀬直樹さんが近代史を書きたいということで、スタッフが一所懸命に近代史の資料を漁っていて、警備業にも興味が

あるので色々と教えて下さいと連絡がきました。でも今私は、論語のほうにしか関心がありませんので、警備業界のことは他に専門家がいますから、そちらを紹介しました。猪瀬直樹さんは本を書くときにスタッフを使っている。組織を使って本を書く人なんだなと思いました。組織を使うのに慣れている。

前にも申し上げましたが、作家の堂門冬二さんは地方で講演をすると、その土地の大きな本屋に行き、ここの棚からここの棚までと言って購入して、色々と見て指示をすると、だいぶ物慣れたスタッフたちがテープ起こしをし、それを自分流にアレンジするそうです。また仕事上で腹が立ってどうにもならないときには、場末の映画館に入って、その後ビジネスホテルに入り、架空人物に向かって叩きたいだけ叩いて氣が済んだら寝るそうです。これは佐藤一斎祭りでお会いしている時にお聞きしました。やはり憂さ晴らしというのは、それぞれ色々なやり方があるのだなと思いました。

ちなみに 36～7 年前ぐらいですが、私が JC という所で『北方領土 100 問 100 答』という本を書きました。書いたときに私は北方領土問題委員会に所属をしていまして、本を書こうとなりましたが、たまたま今年は日本青年会議所は本を出版しないと決めていた年でしたが、私は書きたいから書きました。書いたら、色々な団体があるので良さそうな団体をピックアップして推薦状を取り集めました。そして各所から推薦所を取り集めたのだから出版してくれなければ困るといって、日本青年会議所の組織に上げっていって OK を貰いました。外堀を埋めて内堀を埋めて YES としか言えないようにして出しました。あと売り方ですが、各地方から代表者が来ているので割り当てただけです。会員は何人かと聞いて振り分けて、そしていついつまでに入金をして下さいとやりました。全部完売しました。ひどい売り方ですね。これは私が本を書いて世の中に出した、最初の本の出し方でした。

その時からお付き合いが始まった木村汎先生は、今でもお付き合いをしております。木村先生のお姉さんが作家の山村美沙です。世間的には兄弟ひっくりかえっているそうです。北海道にお住まいの木村先生宅にお邪魔をした時、奥さんがロシア語放送を聞いて、解釈が違うと夫婦で喧々諤々とやるそうです。面白い家庭です。

昨年の 12 月ですが、明徳出版から『陽明学のすすめ』在庫の問い合わせがありました。「ありますよ」と答えましたが、「でも、どうして？」と聞いたら、ある本屋さんがインターネットの書評で勧めてくれた影響で、たくさん売れて在庫が少なくなったので、もし在庫があれば分けて欲しいとのことでした。我々が勉強をしている知足というものについて、世間で関心を持つ人が広まりつつあるのかなと感じます。

恒例の質問

・今年に入ってから嘘をついていない人、良い日が続いている人。

・今年に入ってから有難うと言い、有難うと言われることが多かった人。
・今年に入ってから自分だけの時間を持った方、我を忘れて没頭する時間、自分の時間を一回でも持った方。
これは幸せな時間です。

城山三郎さんの本に、人間を支える三つの柱と紹介されています。私の解釈ですと、一番目は無我夢中で没頭する時間を持つ。心豊かに磨く時間がある人。
二番目は、肉親・家族・友人が、自分を支えているなと思える人。
三番目は、志を持っている人、目標を持っている人。これ三つを持っている人は、幸せだと思います。

基本哲学「知足」

足るを知る人は、魅力満載の人だと思います。足るを知っている人は笑顔が出ます。笑顔が出たときに、顔中がくしゃくしゃになるような笑顔があるし、あの皺が良いねと思えるような人もいます。そうそう目の中にも皺は出来るそうです。
昨年、薬剤師の先生が病氣を治したければ薬を飲むなという運動を展開しているという話をしました。その時の顔の運動がちょうどいいなと思っています。前に習った時は「いう・いう」という口の動かし方。薬剤師の方は「すき・すき」と発音して下さいと言っていました。御自分で鏡を見て、口の動き方と唇の動かし方を見ていくと動かし方が決まってきます。それぞれあります。私は腹筋をする時に、唇を動かすようにしています。両方出来るなと思って実践しています。
足るを知る、良い笑顔。よい皺の付け方。どうぞ実践をしてみてください。それがそのまま魅力に繋がってくると思います。魅力は、足るを知っていると良い笑顔が出てくる。良い笑顔が出てくるのは、世代だけではなく努力して然るべきだと思います。

感謝であふれている所でしたら、それをストレートに受け止めていけば、みな近寄りたくなります。
ちょっと良いなと思ったら拡大法で、どんどん拡大解釈をしましょう。自分が自分のことを信じなければ、自分で自分のことを凄いなと思わなければ、笑顔はなかなか出てこない。自分はたいしたものだと思って寝れば、良いでしょう。
知足の人は、魅力たっぷりの人と定義づけられます。

論語の視点

吉良評議員の素読は、春の陽射しを感じるような温かい素読です。良い素読でした。人によって違うなと感じます。

【九】子　衛に適く。冉有　僕たり。子曰く、庶いかなと。冉有曰く、既に庶し、又何をか加えんと。曰く、之を富まさんと。曰く、既に富めり、又何をか加えんと。曰く、之を教えんと。

孔子が 55 歳の時、26 歳の冉有と衛に行きました。孔子が馬車に乗り周りを見渡して、「何とここは人が多いな」と、冉有が「これだけ人が多いと、何をしたらよいでしょうか」と聞きました。孔子が「ご飯が食べられて、屋根の下で住めるように、それ相応にお金が回るようにしたいものだね」と答えました。冉有は「お金は十分循環している。国民全体が中流階級になったら、次は何をしたら良いですか」と、孔子は「教育が大事だ」と答えました。

学ぼうという意欲のある人達を増やしていく。学ぼうという意欲をもてれば、自ら学び始める。学び始めるとお互いが啓蒙しあう。そういう社会にしていきたいと孔子が答えたということです。

【十】子曰く、苟も我を用うる者有らば、期月のみにして可なり。三年にして成ること有り。

孔子は、私を使えば一年でその国を真っ当な国にしてみせる。三年あれば十分な成果は出せるという。

孔子は諸国を歩いて就職口を探しています。言い換えれば、どこかの会社の再建をするには、三年あればよいという。

判断基準でいけば、会社の再建とか国の再建は、一年でだいたい目途をつけて三年で何とかするものだ。三年で何とかならなければ本当に死ぬ氣でやるしかない。また三年かかるということで、三年をタイムスケジュールで考えればよいでしょう。

集まりで如水会館に行きますが、渋沢栄一の額が飾ってあります。「功名は多く窮中に向かいて立ち　禍患は常に巧処より生ずる」

その人が成し遂げた功績は、ほとんどが困窮している困難の中から成功する。失敗は常に得意満面の時に生じる。だから得意になっている時は危ない。さあ頑張ろうと歯を食い

しばっている時には、素晴らしいものが出来る。
　我々もここら辺は考える必要があると感じます。出典は、中国の漢詩人「陸遊」の漢詩「読詩」です。その中にある文章です。

　今年の 8 月で、私の関係している会社が 40 周年になります。40 年になる区切りで、次にまた向かって行きたいと思います。
　「窮中に向かいて立つ」とありますが、その会社は窮中にあると私は思っています。困難なところに直面している。何故か、利益率が悪い儲かってない会社。会社が困難な時、そして会社が倒産しそうな事故やトラブルが昨年ありましたから、それを必死になってくぐり抜けて、やれやれと思って得意になっているから危なっかしい。手を広げたり、売上げを上げたりするのは、危なっかしい。私は危機を非常に感じていると、強く言っています。得意になると危ないですから。

時事評論
　今日の新聞を見て詭弁を使っていると感じました。詭弁を使っているというのは、今日の産経新聞で「平成 27 年度の予算案の一般会計総額を 96 兆 4 千億から 6 千億にする方向へ最終調整に入った」という記事があります。
　もうひとつ「政府が 9 日臨時閣議を開いて総額 3 兆 1180 億円の平成 26 年度補正予算案を決定した。補正予算案は昨年末に決定した 3 兆 5289 億円の経済対策の財源であり、当初予算案 95 兆 8823 億円と合わせた総額が、99 兆 3 億円となる」と、全然関係ない紙面のところに書いてありました。
　平成 26 年度の出だしは 95 兆で予定したけれど足りないとなり、あちこち借金して 99 兆にした。別のところに 96 兆にした。これは何なんだ嘘つきだなと思います。だったら「補正予算案は大体これぐらいになるかもしれません」とつけて記事を紹介しないといけないのに、こういうことを詭弁という。
　新聞記事の根拠となっているものをサラッと読んでしまうと怖いので、あっちの文章、こっちの文章、昨日の新聞、一昨日の新聞も照らし合わせて、頭の中で整理しないと間違えてしまう。どうぞ新聞を御覧になる時には、そこら辺も氣をつけてください。

　最後に天風先生の話ですが、天風先生が死にかけてパリに行った時に、当時の女優サラ・ベルナールからカントの話を聞きました。カントは背中に瘤があり喘息持ちでどうにもならない。医者がある日「辛いだろう苦しいだろう、でも心は苦しくないでしょう」と言ったら、17 歳のカントは「心は何ともないですね」と。医者は「心が苦しくないのなら、ご

両親には辛いとか苦しいとか言ってはいけないよ。それは肉体が苦しいだけであって、心には関係ないことだから」と言いました。17 歳の少年は素直だから「分かりました」と言って、それから辛い苦しいとは言わなくなった。そうするともう直ぐ死ぬかと思われたカントは長生きして、世のため人のためになる哲学を生み出しました。

天風先生は 30 代後半で、そういうことにハッと氣がついた。もう少し早く聞いていたらと思いますが、人間みな同じで肉体的にきつい・苦しい・大変だけではなく、会社が倒産した・しそうだ、または肉親が亡くなったなど色々なものが出てきても、辛い苦しいということを表面で受けて、心の中は動かさない。そういう訓練をすると、どんどん好転していく。周りにも影響を与えていく。

第三次世界大戦が始まっても、どんどん良い影響を与えることによって心を強くしていくことを勧めていただけたらと思います。

時間になりましたので終了いたします。有難うございました。